



## 学校給食週間：「いのちを いただく」

食べ物が満ちあふれている時代に、食べ物のありがたみを伝えることは難しい。食べ物を粗末にしてはならないと、教えることは難しい。

その食べ物が、既に粗末にされている。日本の1年間の食品廃棄量は2000万トン以上。1人1日1800Kcalで生活している発展途上国での3300万人の年間食料に相当する。そんな時代に、どのようにして食べ物のありがたみを伝えるか。

「命」でしかないのだと思う。

私たちは食べ物を食べて生きている。生きることは食べること。すべての食べ物は命だ。肉も魚も野菜も米も、すべてが種を残そうとする生命体だ。

人が生きるということは、命をいただくこと。殺すこと。

私たちの命は、多くの命に支えられている。それを実感したときに、食べ物のありがたみがわかる。食べ物を粗末にしてはならないとわかる。



2月1日(月)全校集会での校長講話、全国学校給食週間<1/24~1/30>に合わせて、「いのちを いただく」という絵本を読みました。食肉加工センターで働く坂本さんが出合った牛のみいちゃんひとりの女の子の感動実話です。(1月18日の全校集会で読もうとしていたものです)

坂本さんの職場では毎日毎日たくさんの牛が殺され、その肉が市場に卸されている。牛を殺すとき、牛と目が合う。そのたびに坂本さんは、「いつかこの仕事をやめよう」と思っていた。

ある日の夕方、牛を荷台に乗せた一台のトラックがやってきた。「明日の牛か…」と坂本さんは思った。

しかし、いつまで経っても荷台から牛が降りてこない。不思議に思って覗いてみると、10歳くらいの女の子が、牛のお腹をさすりながら何か話し掛けている。その声が聞こえてきた。「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ……」

坂本さんは思った、(見なきゃよかった)

女の子のおじいちゃんが坂本さんに頭を下げた。「みいちゃんはこの子と一緒に育てました。だけん、ずっとうちに置いとくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんと、お正月が来んとです。明日はよろしくお願ひします…」

(もうできん。もうこの仕事はやめよう) と思った坂本さん、明日の仕事をお休みすることにした。

家に帰ってから、そのことを小学生の息子のしのぶ君に話した。しのぶ君はじっと聞いていた。

一緒にお風呂に入ったとき、しのぶ君は父親に言った。

「やっぱりお父さんがしてやってよ。心の無か人がしたら牛が苦しむけん」

しかし、坂本さんは休むと決めていた。

翌日、学校に行く前に、しのぶ君はもう一度言った。

「お父さん、今日は行かなんよ!(行かないといけないよ)」

坂本さんの心が揺れた。そしてしぶしぶ仕事場へと車を走らせた。牛舎に入った坂本さんを見ると、他の牛と同じようにみいちゃんも角を下げて威嚇するポーズをとった。

「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんとみんなが困るけん。ごめんよう」

と言うと、みいちゃんは坂本さんに首をこすり付けてきた。

殺すとき、動いて急所をはずすと牛は苦しむ。

坂本さんが、「じっとしとけよ、じっとしとけよ」と言うとき、みいちゃんは動かなくなった。

次の瞬間、みいちゃん目から大きな涙がこぼれ落ちた。

牛の涙を坂本さんは初めて見た。……………





平成27年度 全校集会【1月】の感想  
「いのちを いただく」



子どもたちの感想 (〇:学年)

これからは、ごはんを食べるときはこころをこめて「いただきます」といって食べたいです。①

うしさんのおにくにはにんげんもたべなきゃいけないです。だからいのちをもらっているから、すききらいをせずにちゃんとたべものをたべないといけません。①

いま生きているのはすごいことなんだな。いろいろないのちにささえられているのかな、とかんどうしました。②

私たちは生まれ、いまここに生きています。それ自体すごいことです。しかし、それはたくさん命をいただいているということです。いろいろな命を奪っているということです。私たちは、奪われた命の意味も考えずに、毎日、肉を食べています。自分で直接手を汚すこともなく、坂本さんのような方々の悲しみも苦しみも知らず、肉を食べています。「いただきます」も「ごちそうさま」も言わずにご飯を食べることは、私たちには許されないことです。感謝しないで食べるなんて許されないことです。食べ残すなんてもってのほかです。

おいしいちゃん言葉です。

「みいちゃんのおかげで、みんなが暮らせるとぞ。食べてやれ。みいちゃんに、ありがとう、と言うて食べてやらな、みいちゃんが、かわいそかろ？食べてやんなっせ。」

私たちの命は、多くの命に支えられていることを感じて欲しいと思い、「いのちを いただく」の絵本を読みました。

いろいろないのちでささえられているので、「いただきます」「ごちそうさまでした」を言って食べたいです。かんしゃをこめて、肉や魚をたべていきたいです。②

動物をころす仕事をしている人は、動物のことをかわいそうと思うけど、他の人たちがこまるからだいじなごんごんを思っています。ありがとうございますや「ごちそうさま」を感じちゃって食べます。③

牛が殺されるのがかわいそうでした。わたしは、「いただきます」といって食べなさい」といつもお母さんに言われていました。でもこの本をよんで「いただきます」や「ごちそうさまでした」は、感謝の気もちなんだなあと思いました。これからは、のこさずきちんと食べてあげたいです。③

今まで気にしないで食べていたのですが、命をいただいていることをあらためて知って、「ありがとう」と思いながら食べていきたいです。お話の女の子の気持ちはかわいそうですが、自分がかっていた牛のお肉を食べられてよかったのかなとおもいました。これから牛は、女の子の体で生き続けていくと思います。④

いままでは、「いただきます」をただのあいさつだと思ってましたが、ほんとうは、動物の命をいただくという意味を持っているとわかりました。今日からは、命にかんしゃしながらいただきます。④



いつもなにげなく食事をしていたけれど、その食材は大切な命だということをわすれないようにしたいです。⑤

私は、4年生の時に校長室でこの本のちがう方の「いのちを いただく」を読みましたが、また改めて読んでみると、生物は、命をいただかないと生きていけないので、食べ物になった生物にかんしゃして食べることは大切だと思いました。⑤

私たちは、いろんな命に支えられて生きている。命は尊いものなので、「いただきます」「ごちそうさまでした」と感謝の気持ちを持って言いたいと思いました。⑥

わたしたちの身近な食べ物は全て命です。それを今まで知らずにたくさん食べてきました。だから、これからは、坂本さんのような人たちの気持ちをよく考え。感謝して食べたいと思いました。⑥

「いのちを いただく」<西日本新聞社>

作者の内田さんが、2007年の秋、熊本県のある小学校に依頼された講演に出向いた際、「いのち」についてお話しされたのが坂本さんです。講演の前の授業参観で1・2年生の児童と保護者が食肉センターに勤めている坂本さんの話を聞いていました。内田さんは、だんだんと坂本さんの話に引き込まれ、ついには、ポロポロと涙があふれたそうです。その夜、坂本さんの話がどうしても忘れることができず、たくさんの人に知ってもらいたいとの思いから、「いのちを いただく」が生まれました。



文～助産師：内田美智子さん  
「いのちを いただく」<西日本新聞社>あとがき より

坂本さんは、お話の中で、こんなエピソードも紹介してくれました。坂本さんには息子さんの他に娘さんもいます。娘さんは現在、介護士として働いています。

ある日、居酒屋で一緒に食事していると娘さんが「お父さんの仕事と私の仕事は似とるね」と言ったそうです。坂本さんは「何が似とるもんか。俺の仕事は牛や馬の命をとる仕事ぞ。おまえの仕事はお年寄りの世話をする大切な仕事やろ。お年寄り喜んでくれる。でも俺の仕事は喜ばれたりせん」と答えました。娘さんは、まっすぐに坂本さんを見て言いました。「あんね、おとうさん。私は、最期に会った人間が私でよかったなあって、お年寄りに思ってもらえるよう、毎日お世話している。お父さんも、牛や馬や豚に最期まで気持ちよく生きてほしいと思っとるけん。なでたり話しかけたりするんやろ。最期に会った人間がお父さんでよかったなあって、思ってもらえるようにしとるやろ？だけん、同じなんよ」

